国文学研究資料館紀要　第四号（一九七八年三月）

松花和歌集巻第四（紹介と翻刻）

福田秀一

要旨　鎌倉末期、元徳三年頃の成立と考えられる「松花和歌集」は、為世門の四天王の二人で鎮西に下った浄弁の撰かとも言われ、ほぼ同じ頃に成った「続現葉」・「臨永」の両集と共に、恐らくは当時の二条派の現存歌人の集として、種々な意味で注目されるが、従来は巻一（春）・五（恋上）の両巻と巻三（秋）・四（冬）の各冒頭を含む若干の断簡計一三〇余首が知られているに過ぎなかった。

ところが先般、巻四の全文とおぼしき一本が出現し、当館に入ったので、ここにその本文を忠実に翻刻し、初二句索引と若干の書誌的解説とを付した。

なお、筆者はさきに、右に述べたような観点から「続現葉・臨永・松花三集作者索引」を編んで公にした（『武蔵大学人文学会雑誌』第三巻第二号、昭四六・九）が、近く、今回新出の巻四に見える歌六六首に関してそれを増補した上、若干の誤記誤植等をも訂したものを、公表するつもりである。（昭和五十二年十月）

鎌倉末期の私撰集の一つで元徳三年（一三三一）頃の成立と見られ、鎮西に下った浄弁の撰かとも言われる「松花和歌集」は、ほぼ同年の成立と見られてやはり浄弁が関係しているかとも推測される「臨永和歌集」（一〇巻）やそれらより八年位前（元亨三年）の成立かと見られる「続現葉和歌集」（巻一～十のみ現存、もと二〇巻か）と共に、二条派の当代歌人（恐らくは成立当時現存の歌人）の集として、種々な意味で注目されるが、従来は別々に発見された巻一（春、六六首）・五（恋上、五八首）の両巻と巻三・四すなわち秋・冬部の各冒頭を含む若干の断簡、計一三〇余首が知られているに過ぎなかった。

ところが先年、巻四の全文とおぼしき一本が出現し、当館の有に帰した。『思文閣古書資料目録』第八十七号（昭四九・七）に掲載された品で、同目録には、

松花和歌集巻第四　嘉元～正中年諸家冬歌六十六首、江戸初期筆写／紙高二六糎長サ二・八米、巻子箱入　「冷泉府書」の印捺（注、／は改行箇所）

と注して、本文冒頭から一四番の作者名までの写真が掲げられている。実は当時、筆者はちょうど上洛するついでがあったので、店頭で実見して右の紹介に大きな相違のないことを確認し、購入の手続を進めたのであった。

その後、整理も済みながら、開館が延び〳〵になって、本書も他の整理済資料と同様、暫く閲覧に供され得ずにいたが、今夏当館がようやく開館の運びとなり、去る七月閲覧利用業務を開始したことは、周知の通りである。そしてそれを記念した「国文学研究資料館開館記念特別展示」に本書も出品陳列したところ、早くも何人かの専門家の注目を集めたようである。

その間われわれは、本書の資料的価値にかんがみて、『国文学研究資料館報』第八号（昭五二・三）に、「新収資料紹介⑤」として本書の概略を報告した。一応の書誌はそこに記したので、今回はその部分を左に転記しておく。

巻子本一軸で江戸初期写（但し文字は古雅）。表紙は濃縹地緞子に金唐草刺繍で、二六・七×一九・二糎。左上に「嘉元一年／鎌倉時代也」と墨書した小紙片を貼る。見返しは鳥の子に金切箔で雲霞に山を描く。本文は楮紙、見返しに続いて巾約九糎の白紙を置き、以下二六・七×約二〇・五糎の料紙一四枚継ぎ、鳥の子で裏打。末尾は裏打の鳥の子を約二八糎余白として付け、全長約二・八米。軸は黒檀。現在は巻子であるが、元来は一面一二行の冊子であったかとも思われる。本文と同筆のミセケチ訂正の他に、作者名（多々良貞弘）の下に一箇所、別時の加筆かと見られる注記がある。巻頭に「冷泉府書」の印がある他、奥書・識語等なし。

本文は（中略）六六首。一首一行書き。因みに、既知の徳川美術館蔵の断簡一〇行（本集巻四冒頭）は、当館本と用字・配行が異なり、忠実な転写関係にあるとは言えないようである。

右について二点だけ補足しておく。一つは、「冷泉府書」の印は藤原惺窩の蔵書印の由で（井上宗雄・橋本不美男の両氏の御通報による）、そうならば本書は惺窩の旧蔵・手沢本と考えられ、本書の書写年代や系統を推定する一つの手がかりになるかも知れないということである。但し小野則秋氏『日本の蔵書印』の巻頭図版に載せる惺窩の印の文字は隷書であるが、本書のは楷書である。また同書の索引に示す為経の蔵書印は、そこにも言う通り角印で、本書のとは違うようであるが、いずれにせよ本書が冷泉家から出たことは確かであろう。もう一つは、右解説の末尾に触れた徳川美術館蔵の断簡は久曽神昇氏の論攷（「私撰集と古写断簡の意義」、『国語と国文学』昭四六・四）に紹介されている、ということである。

さて今回は、右のようにして当館に入った新資料の本集巻四を、できるだけ忠実に翻刻した。既に知られている巻一・五および若干の断簡をも併せて一つにまとめた形で翻刻することも考えたが、近くその機会のあることを期待し

つゝ、今回は先ず新出本の姿を忠実に伝えることを目的とした。

翻刻に当って取った具体的な方針は、一般の慣習と違わないつもりであるが、要点を順不同に箇条書で示せば左の如くである。

一、漢字仮名の別や仮名遣等は底本のままとしたが、変体仮名は通常の平仮名に改めた。また、漢字(底本は行・草書)の字体はなるべく底本のままとしたが、若干当用字体に改めたものがある。

二、詞書には適宜読点を加えた。

三、詞書等の改行は底本通りとし、文字(ミセケチ傍書を含む)も、できるだけ底本の通りとしたが、作者名の位置は、印刷の体裁上、下方へ移した。底本では、ほぼ各歌の一三～一五字目の辺から始まって各歌末より二字位上までに終るようになっている。

四、料紙の継目を」印で示し、紙数を記した。

五、索引検索の便その他を考えて、歌頭に巻四としての一連番号を付した。

六、下欄に、国歌大観および新校群書類従の各索引で知り得た勅撰集等との共通歌につき注した。

松花和歌集巻第四

冬　哥

嘉元ゝ年百首哥たてまつりける時、初冬

前大納言実教卿

一 かたみとて露も残らす花薄昨日の秋の袖の別に
おなし心を　宰相典侍

二 露をきししのゝをさゝのよのほとに結ひかへたるけさの初しも
文保百首哥たてまつりけるに　権中納言為定卿

三 しくるともよそにはみえすたえ〳〵にと山をめくる峯のうき雲
時雨を　藤原行房朝臣

四 浮雲の時雨て過るほとなれやたえ〳〵みゆる遠の山のは」一
後宇多院十首哥めしけるとき、時雨
雲といふことを　中納言公明卿

五 浮雲のたゝよふ山の風はやみしはしもふらてゆく時雨哉
冬の哥の中に　前中納言有忠卿

六 さためなく夕の雲はうき立て風をしるへとふる時雨哉
二品法親王覚

七 冬は猶袖もほしあへす老らくの身にそふ物とふる時雨哉
元亨元年十月亀山殿にて題をさく
りて人〻哥合し侍けるとき、時雨
藤原経季朝臣

二―新千載五四〇（久明親王）ト一・四・五句同ジ

三―風雅七二三

八 晴くもりたゝよふ雲のそらにのみ夕日のかけもうち時雨つゝ

惟宗光吉朝臣」二

九 奥山のまさきのかつらうちはへてくるゝもしらすふる時雨哉

おなしこゝろを　源清兼朝臣

一〇 吹風のさそふまゝなる浮雲の行衛さためす降しくれかな

伴　經　清

一一 むはたまの夢こそあらめ月をたにさたかにみせぬ村時雨哉

前大僧正道意

一二 晴くもり閨もる月のかはる哉折〳〵すくる夜はの時雨に

紅葉殘秋といへることを　前大納言為世卿

一三 むら〳〵にさそひ残して紅葉ゝをあらしも秋の形見とやみる

落葉をよみ侍ける　藤原為嗣朝臣」三

一四 神無月木葉やもろく成ぬらん時雨てすくる山おろしの風

亀山殿にて人こ題をさくりて哥合し

侍る時、落葉　権僧正道我

一五 散つもる木のはのゝちそ山さとのさひしかりける程もしらるゝ

一六　いまよりの衣手さむし嵐山峯の木葉ももろく散ころ　　前中納言有忠卿

題しらす　　前関白太政大臣家さぬき

一七　一かたにさそふともなき木のは哉風はやとりもさためさりけり　　平英時

一八　けさみれはうつろふ色もなかりけりまた霜とけぬ庭の白菊　　慶運法師

一九　分わひぬゐなのゝをさゝ霜をきて一夜の宿も嵐ふく比」四　　藤原教秀

二〇　枯はつるまかきの草にをきそへて夕霜さむきあさちふの宿　　よみ人しらす

二一　あさちふの枯はかうへにをく霜をはらふもさむき風の音哉　　平貞俊

二二　明ゆけはをきそふ霜にかたふきてしのゝめさむし冬の夜の月　　よみ人しらす

二三　故郷の庭の冬草跡もなしいつより枯し人めなるらん

うへのをのことも題をさくりて哥つかう

まつりけるつゐてに、寒草をよませ給うける

一六―新千載六一五

今上御製

二四 名残なくはや枯にけりよな〳〵は秋よりをきし霜の下草」五

百首哥よませ給うける時、冬朝といふこと

を　　新院御製

二五 あさ霜のはたれにふれるくさのうへにさすや日かけの色寒(ママ)けし

題しらす　　よみ人しらす

二六 をのつから霜枯のこるあしのはにたえ〳〵さやくまのゝうら風

平久義

二七 なにはえや枯はのあしのうちさやき夕霜さむくうら風そ吹

平時英

二八 いりしほのさもこす程や湊江の蘆間の水も氷とつらん

實賢法師

二九 ゆふ時雨一むら晴る浮雲の跡待えたる山のはの月

尾張久重」六

三〇 雪気かとみえつる雲は空晴て霜に寒行冬のよの月

大納言親房卿家の詩哥合に、冬夜

権律師浄弁

三一 水鳥のかもの川せにすむ月やあたりもとけぬ氷なるらん

哥（冬）のうたとて　　前権僧正雲雅

三二　秋の色は露も殘らぬあさちふに月よりほかの面かけそなき

正中二年十一月内裏にて三首哥講せら

れける時、冬月　　前のうちのおほいまうち君

三三　つかうとて幾とせ袖にやとすらん霜ふかきよの雲の上の月

題しらす　　宮内卿資明卿

三四　冬川の氷の上にすむ月はゆくともみえて影そかたふく

藤原利尚」七

三五　紅葉ゝはみ山をろしに散はてゝ梢にのこる有明の月

権僧正道我

三六　興つかせさそさむからし松しまやをしまのなみに千鳥鳴也

前大僧正慈勝

三七　なく千鳥沖津の浪やたかゝらし吹くる風に浦つたふ也

旅泊千鳥といふことを

二品法親王覚

三八　我も又ひとりうきねの浪枕ともなし千鳥をのれのみかは

内裏にて人ゝ題をさくりて哥つかふま

つりけるとき、千鳥

権中納言隆資卿

三九 風渡る興つ塩せの浪の上にをのれもさはく友子鳥かな」八

法親王承

冬の哥の中に

四〇 あしかものをのか羽風のさゆる夜にうきねの床や先氷らん

平貞直

四一 なくかものさはく入江の蘆のはに夕浪かけてうら風そふく

能譽法師

四二 おちたきつはやせにうかふ水鳥の身さへなかるとねをや鳴らん

法印公順

四三 さゆるよの暁をきのあかの水氷そさきに結ひそめける

春宮大夫公宗卿

鷹狩を

四四 枯はつるかりはのをのゝ草かくれあらはれてのみたつきゝす哉

よみ人しらす

四五 風さむみかたのゝましはかりくれてかへるたもとに霰ふる也」九

津守國夏

四六 冬のよはとかへる山の椎しはのしはしとおもへとかりくらしつゝ

民部卿為藤卿家に五首哥よみ侍ける

時、雪

頓阿法師

四七　今朝は先山のははかりうつもれて都のよもにふれる白雪

題しらす　　法印宗俊

四八　けさはゝや時雨もさむき遠方の雲まにみゆる峯のしら雪

藤原為親朝臣

四九　山のはゝしくれて過るうき雲に又降かはるけさのしら雪

前参議雅孝卿

五〇　みわたせはかさなる峯は麓にて雲ゐにつもる冨士の白雪

院御製」一〇

五一　あらち山峯にみゆきの色はあれとやたのゝあさち霜のみそをく

元亨四年二月内裏にて人〻題をさく

りて哥つかうまつりける時、関雪

前内おほいまうち君

五二　かくはかりみちある御代に逢坂のせきをは雪もうつまさらなん

題しらす　　永福門院

五三　解やらぬ池のみきはのあさ氷こほれるほとを雪にみる哉

藤原行朝

五三―新千載六九六（下句、氷れる程に積る雪かな）・百番自歌合六〇左（下句、氷れる程と積る雪哉）

五四　我やとの庭もはたれに降雪をとはるゝあとゝ思はましかは

多〻良貞弘民部大夫信濃守長弘息　弘家孫

五五 けさみれは宿の呉竹うちなひき軒はあらはにつもるしら雪

平範貞」一一

五六 うら人のとまやの軒の岩かねに雪ふきたつる興つ塩風

正中二年十一月内裏にて三首哥講せられ

ける時、禁庭雪といへることを

中宮大夫実忠卿

五七 君か代はいまいくちとせこゝのへに積りかさねん雪庭のしら雪

冬の哥の中に

為明朝臣

五八 つとにおきつかふるみちをいそくとて問人またぬ宿の白雪

雪埋庭といふことを

法親王承

五九 をのつから跡待えたる庭のおもをやかても雪のうつむころ哉

題しらす

新院御製

六〇 雪のうちに色もまかはぬすみかまの煙さへこそさむくみえけれ」一二

入道親王尊

六一 さえまさる霜よの床のいねかてにともなひあかす閨の埋火

前権僧正雲雅

六二 月日のみはやせの川のみなれさほとりあへぬまに年そ暮ぬる

法親王聖

六三　山ふかみ浮世のほかのすまゐしてひとりいそかぬ年の暮哉

元亨二年八月亀山殿にて人〻題をさくりて哥つかうまつりける時、歳暮

丹波忠守朝臣

六四　一とせをゝくりむかふるほとなさも五十の後そわきてしらるゝおなし心を

玄観法師

六五　いたつらに過る月日はしら雪のふるとせしまに暮るとし哉」一三

左おほいまうち君

六六　いたつらに過る月日のつもりぬとけふはおとろとくしの暮哉

（以下余白）

索引

本文の六六首について、その初二句を歴史的仮名遣で表記して五十音順に排列し、歌頭の番号をもって示した。

あきのいろは　つゆものこらぬ　三三
あけゆけは　おきそふしもに　三三
あさしもの　はたれにふれる　三五
あさちふの　かれはかうへに　三一
あしかもの　おのかはかせの　四〇
あらちやま　みねにみゆきの　五一
いたつらに　すくるつきひの　六六
いたつらに　すくるつきひは　六五
いまよりの　ころもてさむし　一六
いりしほの　さもこすほとや　六八
うきくもの　しくれてすくる　四
うきくもの　たたよふやまの　五
うはたま　→むはたま
うらひとの　とまやののきの　五六
おきつかせ　さそさむからし　三六
おくやまの　まさきのかつら　九
おちたきつ　はやせにうかふ　四三

おのつから　あとまちえたる　五九
おのつから　しもかれのこる　二六
かくはかり　みちあるみよに　五三
かせさむみ　かたのましは　四五
かせわたる　おきつしほせの　元
かたみとて　つゆものこらす　一
かみなつき　このはやもろく　四
かれはつる　かりはのをのの　二〇
かれはつる　まかきのくさに　毛
きみかよは　いまいくちとせ　四八
けさははや　しくれもさむき　四七
けさはまつ　やまのははかり　八
けさみれは　うつろふいろも　五五
けさみれは　やとのくれたけ　六二
さえまさる　しもよのとこの　六
さためなく　ゆふへのくもは　四三
さゆるよの　あかつきおきの

しくるとも　よそにはみえす　三
ちりつもる　このはののちそ　一五
つかふとて　いくとせそてに　三三
つきひのみ　はやせのかはの　六三
つとにおき　つかふるみちを　五八
つゆおきし　しののをささの　二
とけやらぬ　いけのみきはの　五三
なくかもの　さわくいりえの　四一
なくちとり　おきつのなみや　毛
なこりなく　はやかれにけり　二四
なにはえや　かれはのあしの　二七
はれくもり　たたよふくもの　八
はれくもり　ねやもるつきの　三
ひとかたに　さそふともなき　七
ひととせを　おくりむかふる　六四
ふくかせの　さそふままなる　一〇
ふゆかはの　こほりのうへに　二四

ふゆのよは　とかへるやまの　四六
ふゆはなほ　そてもほしあへす　七
ふるさとの　にはのふゆくさ　三三
みつとりの　かものかはせに　三二
みわたせは　かさなるみねは　五〇
むはたまの　ゆめこそあらめ　二
むらむらに　さそひのこして　三三
もみちはは　みやまおろしに　三五
やまのはは　しくれてすくる　四九
やまふかみ　うきよのほかの　六三
ゆきけかと　みえつるくもは　三〇
ゆきのうちに　いろもまかはぬ　六〇
ゆふしくれ　ひとむらはるる　二九
わかやとの　にはもはたれに　五四
わけわひぬ　るなのをささ　一九
われもまた　ひとりうきねの　三八